

## タイ現代史を学ぶための読書案内（ライブラリー・コーナー）

著者	小林 磨理恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	47-47
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00045713">http://doi.org/10.20561/00045713</a>

## タイ現代史を学ぶための読書案内

小林 磨理恵

現代の問題を考察する際に、それまでの過程、すなわち現代史をたどる作業は欠かせない。本稿ではタイの現代を知る手がかりとなる書籍を紹介する。

タイの通史(古代〜二〇〇六年)を扱ったものに柿崎一郎『物語タイの歴史』(微笑の国の真実)(中央公論新社、二〇〇七年)がある。末廣昭『タイ：開発と民主主義』(岩波書店、一九九三年)は、一九五八年のサリット首相によるクーデタから一九九二年の五月流血事件までの社会の変化を追う。その続編にあたる末廣昭『タイ：中進国の模索』(岩波書店、二〇〇九年)は、民主化、現代化、王制を切り口に、一九八八年からの二〇年間を分析する。パースック・ポンパイチット、クリス・ベーカー『タイ国：近現代の経済と政治』(刀水書房、二〇〇六年)は、現代タイの経済と政治の発展に関する詳細な概説書である。

タノーム軍事政権が学生を中心とするデモのなかで倒さ

れた一九七三年の二〇・一四事件の前後を追ったものに、P・C・チャンダー、T・スパウオン『革命に向かうタイ：現代タイ民衆運動史』(柘植書房、一九七八年)がある。同じく二〇・一四事件についてフェミニストの経験と教訓を記録したものにスニー・チャイヤロット『フェミニストが語るタイ現代史』(二〇・一四事件と私の闘い)(明石書店、二〇〇七年)がある。プオイ・ウンパーコーン『タイ現代史への一証言』(井村文化事業社、一九八七年)は、一九七六年の二〇・六事件(血の水曜日事件)の主舞台タマサート大学の学長であったプオイによる、事件についての証言である。

スコアタイ王朝から五月流血事件までを扱った加藤和英『タイ現代政治史』(国王を元首とする民主主義)(弘文堂、一九九五年)は、「タイ民主主義」の内実をタイ史の原点に戻って検討する。一九九〇年代の民主化過程に焦点を当てた玉田芳史『民主化の虚像

と実像』(タイ現代政治変動のメカニズム)(京都大学学術出版会、二〇〇三年)は、民主化の主役とされてきた中間層を虚像であるとし、その実像に迫る。頻繁な軍部によるクーデタはタイ政治の特徴であるが、軍部による最初の革命となった一九三二年の立憲革命の論理と心情とを分析したものに、村嶋英治『ピブーン：独立タイ王国の立憲革命』(岩波書店、一九九六年)がある。

一九世紀末以降のバンコクにおける「無秩序な都市開発」の原因を土地所有史の観点から追究したものに、田坂敏雄、西澤希久男『バンコク土地所有史序説』(日本評論社、二〇〇三年)がある。倉島孝行『タイの森林消失』(一九九〇年代の民主化と政治的メカニズム)(明石書店、二〇〇七年)は、一九九〇年代の「森林地」対「耕地」をめぐる政治的な攻防が、森林地を減少させ、農地を拡大させた構図を提示する。北原淳『タイ近代土地・森林政策史研究』(晃洋書房、二〇一二年)は、一九世紀末から一九三〇年代までの、国家による農地と森林地の管理政策に関する歴史的経過の実

証研究である。経済発展と鉄道を中心とした交通政策との関係を論じたものに、柿崎一郎『タイ経済と鉄道』(一八八五〜一九三五年)(日本経済評論社、二〇〇〇年)、同『鉄道と道路の政治経済学』(タイの交通政策と商品流通一九三五〜一九七五年)(京都大学学術出版会、二〇〇九年)、同『王国の鉄路』(タイ鉄道の歴史)(京都大学学術出版会、二〇一〇年)がある。

矢野秀武『現代タイにおける仏教運動』(タンマガイ式瞑想とタイ社会の変容)は、一九七〇年代以降に上座部仏教の一寺院に仏教運動が生じた背景に、二〇世紀初頭の宗教行政や七〇年代以降の消費社会化の影響を指摘する。

トンチャイ・ウィニツチャクン『地図がつくったタイ』(国民国家誕生の歴史)(明石書店、二〇〇三年)は、国民書院(二〇〇三年)は、国民という観念の創造に地図が果たした役割を論じる。村田翼夫『タイにおける教育発展』(国民統合・文化・教育協力)(東信堂、二〇〇七年)は、ラーマ五世王時代以降の教育の発展と国民統合の関係を論じる。柿崎千代訳『タイの歴史』

タイ高校社会科教科書』(明石書店、二〇〇二年)は、高校三年生用歴史教科書の翻訳であり、学生がどのような歴史認識を持つことを期待されているかが垣間みえる。

昭和初期までの日タイの交流史には、石井米雄、吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(講談社、一九八七年)がある。戦時期の日本による東南アジア侵攻・泰緬鉄道敷設については、ねずまさし『現代史の断面・死の泰緬鉄道』(校倉書房、一九九九年)、抗日・反政府運動の地下組織「自由タイ」の中心人物の動向については、市川健二郎『日本占領下タイの抗日運動』(自由タイの指導者たち)(勁草書房、一九八七年)がある。

早瀬晋三、桃木至朗編集協力『東南アジア史研究案内』(岩波書店、二〇〇三年)には、小泉順子氏、村嶋英治氏によって、タイの主要な資料館や図書館等における史料の保存状況およびその利用方法が説明されているので参考にされたい。

(こばやし まりえ)アジア経済研究所 図書館